

---

# 東京中野区、非日常。

馬宮レンナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東京中野区、非日常。

### 【Nコード】

N7307Z

### 【作者名】

鷹宮レンナ

### 【あらすじ】

東京都、中野区舞台の非日常系ライトノベル。

元ひきこもりの少女が主人公の、常識が通用しないような、そんなお話。

少女を取り巻く人物と、一見普通の非日常。それらを少女の視点から語ります。でも稀に他の人物や、第三者からの視点もあるかもしれません。

まあ、軽い気持ちで読んで頂ければ……幸いです。

## プロローグ

数年ぶりに、外に出た。

ひきこもりでいるのはやめようと思って、思い切って外に出てきたら、数年前とは景色が違った。当たり前なんだけれど、どうにも少し納得がいかなかった。

よく連れていってもらったデパートも、真新しくなっていた。きっと、一度改装工事をしたのだろう。屋上にあつた遊具たちはもうなかった。ここで確かに遊んでいたはずなのに。そう思うと、ちょっと悲しくなった。

よく行っていた菓子屋はまだやっていて。店主こそ変わっていたものの、数年前と変わらなかつた。そこでちょっと、ほっとしたわたくしが居る。

その他のものは思ったより変わっていなかった場所も多かつた。ドーナツをメインに売っている喫茶店や、有名ファーストフード店などは昔のままだった。少し店舗を改装した場所もあつたけれど。

しばらく歩き回つた後、携帯を取り出し友人に電話をかける。数秒間、コール音が続いたが友人はすぐに電話に出てくれた。ちょっとだけ嬉しかったのと、しばらく人と話していなかったから少し緊張した。

「もしもし?」

「もしもし。十七夜<sup>かたなぎ</sup>だけど……つくくん、この街の案内してもらつていいかな? 今お寿司屋さんの前なんだけど……」

「あ、おう、いいぜ、今から行く」

その言葉とともに、電話が切れた。快く……かどうかわからないけど、すぐに来てくれると言つたあたり、友人 誠<sup>まこと</sup>、もといつくくんは、わたしのことをプラスの存在として見てくれているのかもしれない。ちょっと自意識過剰かもしれないけど。

お寿司屋さんの前で、近くにあるゲームセンターや薬局をちらちら

と見ながらつーくんを待つ。一見小学生にしか見えないうなわたしが、冬のこんな時間　それも四時にここに居るのは危ないのかもしれない。辺りはだんだんと暗くなりかけている。元ひきこもりだからそんなに体力もないし、何かされれば一発でノックダウンしてしまう。

そんな、くだらない事を考えているうちにつーくんはやってきた。

でも彼の服装がおかしい。冬、それも真冬なのに、半袖短パン。十九歳の成人近い男の子が真冬に半袖短パン。小学生なら許せるんだろうけど、これは流石におかしいんじゃないか。なんて思ったけれど、つーくんはこんなわたしに、変化したこの街を案内してくれるというのだから、決して口には出さない。

「……しっかし、お前がようやく脱ひきこもりとはなあ……嬉しいぜ」

「えへへ、お外に出てみたくなっただけだけどね。……ごめんね、付きあわせちゃって。ありがと」

「どういたしまして。そんなん平気だよ、俺も仕事入ってこないしつーくんの言う仕事は、なんでも屋だ。つーくんはなんでも屋をしていて、殺しとかあぶないおくすりの販売とかのような危険なこと以外のことならなんでも引き受ける仕事をしている。しょっちゅう誰かを無理矢理引きずり回して仕事をしていることが多いとネットのある掲示板じゃ噂になっていた。それは本人も認めてるみたいだったけど。」

身長百三十五センチの十九歳の女の子と、身長百五十六センチの十九歳の男の子。それは紛れも無くわたし達のこと、周りから見れば小学生と中学生のコンビに見えるのだろう。でもわたしは発達障害らしくて、外見の成長が止まっちゃってるだけだし、つーくんは兄弟に似て背が小さいだけ。

でもこの小さな身長は目立つといえは目立つし、青緑の髪をおさげのツインテールにしている青目の女の子と、アルビノで髪を結って

いる華奢な男の子とかいう髪色とかの身体的特徴も目立つ。というか、目立たないほうがおかしいのかもしれない。

そんなことを考えていると、つーくんが口を開いた。

「んでさ、十七夜。この街の案内っつーか、観光ついでにゲーセンでも寄らないか？」

「あ、いいよー。なんなら、案内はやめてゲーセンで遊びほうけるのもいいよ？」

「マジで？ それじゃあそうしたいんだけど……」

「うん、へーきへーきっ！」

そう言っつーくんと一緒に、しばらく歩けば大きいゲームセンターへ入っていく。

コインゲームだとか、スロットだとか……そんなものもたくさんあって、大人も満足するまで遊べそうな雰囲気だった。

こういうところでやるゲームはきまってるアーケードゲーム。レーシングから格闘ゲームまでいろいろなものがあるけれど、わたしは音楽ゲーム派。最近は四角いパネルに触れる音楽ゲームや、ネットじゃ有名な歌姫の音楽ゲームにハマってた。

でも、わたしはまだ知らなかった。

まさかこのゲームセンターから、非日常という沼に沈んでいくなんて、思っつてもいなかった。

## 一日目【巻】 グッバイノーマル、ハローアブノーマル。

このゲームセンターで、わたしの日常は、非日常へと変わっていった。

ノーマルから、アブノーマルへ。通常から、異常へ。

ゲームセンターなんかでそんなライトノベルや漫画やアニメみたいな経験はしなくなかった。せめて、もうちょっと マシな、というかロマンチックな場所で経験したかった。……過ぎたことを今更言っても駄目か。

ゲームセンターに入ったのはいいものの、お目当てのアーケードゲームは全部先客が居たし、クレーンゲームも特に欲しいものもなかった。から、つくくんが遊びたいと言ったゲームを横から見たりしていた。

時折つくくんがゲームをやらせてくれることもあった。それで少しは楽しめたり、初めてのゲームに興味がわいたりもした。

そうして遊んでいって、つくくんと一旦別行動をとることになった。そしたら、ほんとに暇になってきたからたまたま見かけた、好きなアニメのくじを四回ほどひいて暇潰しをした。どうでもいいけど、くじをひいたら一つだけ、三等賞のフィギュアが出てきたけれど、それはそこまで好きなキャラのフィギュアじゃなかったから家に帰ったらオークションサイトに出品でもしよう、なんて考えてた。

その時。

ゲームセンター内で、どこからか人が揉め合う声が聞こえた。声の低さから察すると男性のようで、二人だけで揉めていたらしい。その片方の声はまさかのまさかでつくくんの声だった。もう一人の声は聞いたことのない声。

とりあえず、その二人が何故揉めているのか気になったので声がする場所へ向かうことに。

そこへ向かう途中、しばしば「またか」とか「恒例行事だな」なん

て声も聞こえた。もしかしてこの揉め事は日常茶飯事なんだろうか。ひきこもっていたわたしにはあんまり理解できない。

声がする場所へたどり着くと、そこにはつーくんと……きつと百七十センチか百八十センチくらいだと思う、背の高い、眼鏡で白衣で、髪を結っている青髪の男の人が争っていた。

「祇ちゃん、まーだ僕様に逆らうつもりい？ チビのクセにさあ！」

「うつせー糸目眼鏡野郎、気持ち悪いんだよブラコンがッ！」

……睨み合つて、如何にも険悪な雰囲気醸し出す二人の姿が、そこにはあつた。如何にも仲が悪そうな二人だけど、きつと世の一部のおねえさま方はとあるフィルターをかけてこの二人を見ることがあるんだろう。中にはおにいさま方も居るかもしれないけど。

周りの野次馬はみんな、「始まるか」とか「なんだいつものことか」とか「仲いいんだか悪いんだか」なんて言つてた。やっぱり日常茶飯事なのかもしれない。……くどいようだけど、元ひきこもりのわたしにはやっぱり理解できない。

止めようにも止められなさそうな雰囲気だけどつーくんがナイフを取り出した瞬間、危ないと思つたわたしがつーくんの服の裾を引っ張つた。出せる限りの力で、思い切り。

そしたら重心のないつーくんはわたしのほうにつんのめつた。その瞬間、ナイフが床に落ちる。

「っ！？ ……オイ、十七夜、何すんだよ？」

「な、なにつて、危ないから……」

「……こんぐれー日常茶飯事なんだから黙つて見ててくれ」

その言葉に小さく何回も頷いた。

けれど次の瞬間、白衣の男の人がわたしの肩に手を乗せ、うんうんと頷きながら口を開いた。

「そうだよお祇くん。このカワイコちゃんが言つ通りそんなモノ出したら危ないよー？」

男の人がそう言つと、つーくんが床に落ちたナイフを拾つた後、

物凄い怒ったような、引きつった笑みを浮かべながら（多分だけ）男の人に向けて中指を綺麗に立てた跡、華麗に親指を下に勢い良く下げた。怖い。こんなに怒ってるっーくんあんまり見たことなかったからかも。

どうでもいいんだけど、肩に手を置かれた時びくってしたのは秘密です。

そしてこの時、わたしは初めて知った。

きつとこれが、非日常なんだろう　って。

グッバイノーマル。

ハロー、アブノーマル。

なんて、かっこつけたような、厨二病こじらせたようなこと考えてたら、しばらく男の人と睨み合ってたっーくんが口を開いた。

「なあ久也ひさやあ、十七夜を放したら今すぐ撤退してやってもいいんだぜ……？」

「断ろうかー。僕様好みのカワイコちゃんだから放す訳ないじやーん」

どうやら男の人は久也というらしい。よし、呼ぶならひーくんって呼ぼう。

……じゃなくて、今この状況からどう脱出するべきか。ひーくんはわたしにくつついてる。んで、っーくんはひーくとナイフを持ってたまま睨み合ってる。ぶっっちゃけ、逃げたい。

スリル満点の非日常が欲しいと言った時もあったけれど、実際に非日常に片足突っ込んでいくと逃げ出したくなる。あの日のわたしをほたいてやりたい。

ほんとにどうしよう。

なんて思ってたたら、っーくんがいきなりひーくんのことを蹴り飛ばして、ひーくんがわたしから手を放した瞬間わたしの手を引いて勢い良く走り出した。

少しよろけそうになりつつも、しっかりとっーくんの手を握ってわたしも走る。

二人で必死に逃げていると、後ろからひーくんが追いかけてきた。通路、というか商店街の人を見事によけながらわたし達は走る。

時折後ろを見てひーくんが追ってきているのを確認しながら走っていた。……けれど、そのせいで人にぶつかった。それはもう勢い良く、どんっ、と。

「たたた……、……って、お？ お前……」

「？ つーくん、知り合い？」

「ああ、知り合いだ。……悪いけど、俺は久也とちよつとファイトしてくるからさ、コイツに案内してもらってくれ」

まさかの展開になった。ぶつかった人はどうやらつーくんの知り合いの人のようで、背の高めな、どこかつーくんに似ている雰囲気のお兄さんだった。

こんな人とも知り合いなんだなー、と思っているとつーくんはその人に話しかけて、少しの間会話した後、わたしをその人に突き飛ばしてひーくんが追ってきていた方向へ向かった。

いまいち頭がついていけなかったが、とりあえずその人に「よろしくお願いします」と頭をさげてみた。そしたらお兄さんも頭をぺこり、と下げてくれた。

つーくと別れ、このお兄さんと行動することに。

とりあえず道端の人の邪魔にならないような場所に移動して、お兄さんに軽く自己紹介をする。

「えと、十六夜十七夜じゅうろくにんです、つーくんの、……祇ぎくんの友達です」

「……話は聞いている。僕は君芽きみめいと絃識しきだ、よろしく」

そんな、どこかぎこちない会話をして、案内が始まる。……はずなんだけれど、どうにもこのお兄さん　いーくんは、なんというか、ぼわぼわしている。それになんか身体的特徴もいっぱいある。白髪で赤目のアルビノさんで、髪を結っているんだけど、髪を結っている部分だけ水色っぽい青髪になってたり（多分染めてるんだと思う）、瞳にハイライトがなかったりと結構目立つ。というか、目立たないほうがおかしい。

白と黒のボーダーの長袖のシャツもなんか、囚人服のようで、首につけられている鉄らしき首輪のようなものとあいまってますます囚人のように見える。でもボトムスはジーンズだから、言われてみなきゃそう見えないんだけど……。

「……とりあえず、行こうか……。案内、だっけ。任せてくれ」

そういーくんは言ってくれたけれど、この人に任せていいのか不安なわたしが居た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7307z/>

---

東京中野区、非日常。

2011年12月29日15時46分発行